

## 八 本眞劍の修行でなくば

佛法修業は眞劍でなくてはならぬ。本眞の自己が頭を出して來ねば、御慈悲は徹底せぬ。本眞劍に自己を眺め、そしてお慈悲に向ふのである。樂信院大律師曰く、「人多く佛智を向ふに置いて、信じかゝる故六ヶしい。退いて自省すれば、願生の心即ち欲生の呼聲の届きたる他力の恵なり」と。

一世の名優團十郎が、歌舞伎の當り狂言、忠臣藏の勘平に扮して舞台上に上つた。方に切腹の場に至ると、此ぞとばかり渾身の技術を盡して、觀客の喝采を得やうと努めたが、只の一人も稱讚して呉れる者はなかつた。斯くて數日。未だ技の未熟なることを反省したる團十郎、深く自己の慢心を悔て、眞實切腹の覺悟を以て、舞台の活劇に一段の至誠を籠め、今や切腹の場に至ると、滂沱たる熱涙と共に双肌抜いだ。三尺の秋水キラリと輝く處、忽ち拍手喝采、「千兩」の聲は劇場内に響き渡つたと云ふ。

かつて、大阪に一俳優があつて、泣くことを稽古してもく、眞の情がうつらない。とてもこれは良師に就くに如くはないと、江戸へ出て、當時の千兩役者の許に、親しく教を受けましたが、「まだ、それでもく」とて許されぬ。最後には、あんまりの事に残念でたまらず、本眞に泣き出した。其の時師匠はじめて「それでよい」と許されたとか。さもあるべき事である。寶生彌五郎と云ふは、幕府の能樂師で非常な名人であります。此の人が、或る大名の能の催しに出で、大得意なる道成寺の清姫を舞ふ事になつた。仲々の盛會である。段々と能の番數も重なつて、愈彌五郎の番になる、太鼓小鼓の打ち込む拍子につれて、「花の處には松ばかり」と、音吐朗々歌ひはじめました。暫くすると例の通り釣鐘が落ちて來て、その釣鐘に伏さつてしまつた。此の道成寺を演ずる時は、鬼女の假面を此の釣鐘の中へ掛けて

置いて、釣鐘に伏きつて居る間に、鬼女の面を被つて、釣鐘の上がるを待つて、鬼女の姿になつて出るのですが、此の日に限つて鬼女の假面がない、仲間の方が彌五郎の藝を妬んでの悪戯です。仲間の方では悪戯でも、彌五郎の方では冗談ではない。本眞劍である。晴の場所である。流石の名人もギョツとせざるを得ない。さりとして魔胡ついて居ては、釣鐘が上がつて了ふ。氣が氣でない途端、胸は煮えかへる。覺えず指は口にくはへられた。紅の血汐さつと迸る間もあらせず、被さつた釣鐘は上がつて、躍り出たのは、生身正當の鬼女、怒髮天を衝いて、口は耳まで裂け、舌は炎に燃え、目は鏡と輝き、顔は血に染んで物凄いこと夥しい。見物一同凄味に打たれて、只茫然たるばかり、その妙技に驚かぬものはなかつた。焉ぞ知らん、その鬼面は、鬼面ならぬ自己の顔に、指噛み切つて血塗つたものであらうとは。否、彼が心の底の鬼心鬼魂が、其儘その顔に、その動作に現はれたのであらうとは。ものは眞劍でなくてはならぬ、本眞の自己が顔を出さなくては、事は成就せぬ。本眞に自己が見られた時、如來の大悲が見られて、「他力の悲願は斯くの如きの我等が爲なりけりと知られて、愈たのもしくおぼゆる」のである。「汝一心正念」とある汝が頭を出さねばならぬ。